

記錄 / 中国抗日战争史写真集

編集主幹 ◎ 沈強



外文出版社

图书在版编目(CIP)数据

中国抗日战争画史新编: 日文/沈强主编; 郭雅坤译. —北京: 外文出版社, 2014

ISBN 978-7-119-08965-2

I. ①中… II. ①沈… ②郭… III. ①抗日战争史—中国—画册

IV. ①K265-64

中国版本图书馆CIP数据核字(2014)第175281号

选题策划: 胡开敏

日文翻译: 郭雅坤

日文改稿: 林国本

责任编辑: 杨春燕 范淑娟

装帧设计: 设计·邱特聪

印刷监制: 冯 浩

中国抗日战争画史新编

沈 强 主编

© 外文出版社有限责任公司

出 版 人: 徐 步

出版发行: 外文出版社有限责任公司(北京市西城区百万庄大街24号)

网 址: <http://www.flp.com.cn>

电 话: 008610-68996047(总编室) 008610-68326174(版权部)

008610-68996189(发行部)

印 制: 三河东方印刷有限公司

开 本: 1/12

印 张: 17

字 数: 50千

装 别: 平装

版 次: 2014年第1版第1次印刷

书 号: ISBN 978-7-119-08965-2

(平)

14800

版权所有 侵权必究

序

中国人民の抗日戦争は中華民族の運命を変えた偉大な民族解放戦争であり、中国人民が永遠に銘記すべき歴史でもある。中国戦線は世界反ファシズム戦争の東方戦場で、中国人民は世界反ファシズム戦争の勝利のために多大な民族的犠牲を払い、同時に輝かしい貢献を果たした。これは世界史における重大な出来事である。

1987年に設立された中国人民抗日戦争記念館は、中国唯一の全面的に中国人民抗日戦争を反映した総合的大型テーマ記念館である。記念館の開館後は、同館の研究者と中国抗日戦争史学会の学者の知恵を結集して、抗日戦争史の研究を深め、一部の難問やホットな問題に的をしぼって研究課題に取り組み、多くの研究成果を出版し、抗日戦争史の普及、民族精神の発揚、中国侵略日本軍の罪悪行為の暴露にしかるべき役割を果たしてきた。

1995年、中国人民抗日戦争勝利50周年に出版した『中国抗日戦争史写真集』はその一例である。同写真集は中国抗日戦争の全

過程を系統的に紹介し、侵略者の残虐行為を暴いただけでなく、同時に中国軍民が血肉をもって敵に抵抗した感動的な事績を紹介している。この写真集は外文出版社により、中国語、英語、日本語の三カ国語で出版された。

1995年から今日まで20年近くになるが、抗日戦争の記憶が時間のたつにつれて薄くなることはない。2014年2月27日の第12期全国人民代表大会第7回会議で9月3日を中国人民抗日戦争勝利記念日、12月13日を南京大虐殺犠牲者国家追悼日に定めた。法律制定の形で記念日と追悼日を定めた目的は、中国人民が日本帝国主義の侵略に抵抗した艱難極まる闘争を永遠に銘記し、人々に過去を忘れず、未来を切り開き、第二次世界大戦の勝利の成果と、戦後に確立された国際秩序を守るように警戒を促すためである。

2014年7月7日、習近平総書記は全民族抗日戦争勃発77周年記念式典に出席して重要談話を発表し、全党、全国各民族人民が

偉大な抗日戦争の精神を発揚し、心を一つにして団結する精神的絆をたえず強め、倦まずたゆまず努力する精神的原動力をもって中華民族の偉大な復興という中国の夢を目指して奮闘していくよう呼びかけた。ここ20年来、学术界の中国抗日戦争に対する研究は以前よりさらに幅広く、深まっており、かつ豊かな成果をあげている。ここ数年の間に中国人民抗日戦争記念館に収蔵された抗戦文化財や史料も極めて充実し、研究レベルも大きく向上した。

中国抗日戦争勝利70周年を記念するため、外文出版社は『中国抗日戦争史写真集』の再度の出版を決定した。それを受けて、われわれは元の『中国抗日戦争史写真集』の構成、説明文、写真を改めて編纂・執筆し直し、新たな成果、新たな観点、新たな資料を加えるよう努め、書名も『記録 / 中国抗日戦争史写真集』とした。本書には1931年から1945年までの中国人民の血みどろの抗戦の経過が全面的に展開され、中国共産党の唱導で生まれた抗日民族統一戦線の旗印

のもとで、国共合作を土台とし、中国軍民がともに日本帝国主義の侵略に抵抗した歴史が重点的に描き出されている。中華民族は世界反ファシズム戦争の勝利に重要な貢献をし、日本侵略者が中国侵略戦争で犯した甚だしい罪悪を鋭く暴いた。

社会に中国の抗日戦争の歴史を紹介し、これによってより多くの人々に中華民族の同時期における不屈の闘争を知ってもらうことはわれわれの重要な責任である。この新編写真集が広範な読者が全面的に中国の抗日戦争を理解し、中国の抗日戦争が世界反ファシズム戦争の勝利に果たした重要な役割を理解する助けとなり、偉大な抗日戦争の精神を発揚するために貢献することを願うものである。

中国人民抗日戦争記念館館長 沈 強
2014年8月宛平城にて

まえがき

20世紀30～40年代の反ファシズム戦争は、人類史上初の世界的規模をもった正義の戦争である。この大戦は1945年9月、軍国主義日本の無条件降伏により終わりを告げ、すでに70年近くが過ぎた。この戦争にはヨーロッパ、アジア、アフリカ、オセアニアの20億以上の人びとが巻き込まれた(当時の世界総人口の5分の4を超える)。およそこの戦争災害に遭遇した人びとは、誰でもあの戦火の絶えざる歳月を忘れられないであろう。

中国は、ファシズム侵略に抵抗するのが最も早く、時間が最も長く、しかも犠牲と損失も最も大きかった国である。中国人民の抗日戦争は世界反ファシズム戦争の重要な一構成部分であるとともに、切っても切り離せない関係をもっている。

1945年8月15日は、人びとが永遠に忘れない日である。まさにこの日に天皇の「終戦の詔勅」が放送され、日本政府が無条件降伏を宣言し、この決定を連合国に伝えたのである。同時に第二次世界大戦の元凶であった日本軍国主義がついに倒れた日でもある。そして中国人民はついに言語に絶する苦しい闘争を戦い抜き、抗日民族解放戦争の最終的勝利をかちとった。

中国人民の抗日戦争は、日本帝国主義の侵略に反対する正義の戦争であった。この戦争は日本軍国主義者が広範な日本人民の意志に違背して扇動挑発した中国侵略の戦争であったが、中国側から言えば、この戦争は中国人民が国家の主権と民族

の尊厳を守るために行った反侵略戦争であった。

抗日戦争は、中国近代史上の一つの転換点となっている。抗日戦争があつてこそ、中国はアヘン戦争(1840)以来のばらばらで砂のような状態に終わりを告げ、中華民族はこの上もなく覚醒して挙国一致で外敵にあたり、中華民族の伝統的な民族精神もこれまでになく高揚した。抗日戦争は、中国の政治舞台における力関係をある程度逆転させ、人民解放戦争勝利のための土台を固め、また中華人民共和国樹立のための条件をととのえた。

中国の抗日戦争は、たんに中国人民と日本軍国主義者との間で行われた戦争ではなく、中日両国間で行われた局地戦争でもない。世界の反ファシズム戦争全体から見れば、世界人民の反侵略戦争の重要な一構成部分であり、中国戦線は第二次世界大戦の東方における主要な戦線であった。中国の抗日戦争は、ヨーロッパ及び太平洋戦線での反ファシズム戦争を力強く支援し、日本帝国主義の世界制覇総合計画を破たんさせ、ソ連侵攻の「北進」陰謀を阻止し、また太平洋戦争中の「南進」日程を延滞させた。さらに重要な事は、中国人民が自らの巨大な民族的犠牲を払うことによって、中国戦線に日本の百万もの大軍を釘づけにし、極東及び太平洋地域への兵力増援を不可能な状態にさせ、連合国軍への圧力を大いに軽減させたことである。太平洋戦争勃発後、日本の全兵力は210万人を擁したが、中国に投入した兵力は140万人

に達し、数百万平方キロに及ぶ太平洋戦線に投入した日本の兵力はわずか40万人にも足りなかった。言い換えれば、太平洋戦争の真最中、日本の総兵力の67%が中国戦線で掣肘されていたことになる。日本軍が中国一国の抵抗で掣肘された結果、太平洋戦線でアメリカを中心とする10余力国軍は、その対決した日本兵力に倍したのである。これは、なんと明白な数字ではないか。もし当時中国が日本への抵抗をやめ、日本が太平洋戦線に大軍を差し向けることができたとしたら、どんな恐ろしい結果になったかわからない。この点、連合国側の統帥者たちも十分了解している。当時のアメリカのルーズベルト大統領は中国の果たした役割について、息子のルーズベルト・ジュニアに次のように評価したことがある——「もし中国がなかったら、つまり中国が屈服していたら、その結果どれほど多くの日本の師団が他方面への作戦に参加することができたであろう、この点をよく考えてごらん。かれら（日本軍）はすぐにオセアニア、そしてインドを占領しただろう、かれらはやすやすとこれらの地区を攻め落とすことができるからだ。そうなれば、かれらはさらにまっすぐ中近東へ進撃していったら……」（『ルーズベルト見聞秘録』中国語版、中国人民解放軍総参謀部訳、1995年、第130頁より）。ルーズベルトは直接の対日作戦指揮者であり、彼のこの論述は、世界反ファシズム戦線における中国抗日戦争の重大

な役割をわれわれに明白に伝えている。だからこそ、当時、中国戦線は、世界の注目を集めた戦場となり、中国も世界の反ファシズム戦場において重要な位置づけとして重視されていた。1942年春、アメリカは中国戦区の設立を提議し、蒋介石の同戦区最高司令官就任を提案した。中国戦区は中国本土及びベトナム、タイ、ビルマ諸国を含んでいる。これから見ても分かるように、連合国は中国の抗日戦争を重く見たのである。また1942年元旦、米英ソ3大国が中国と連合して、共同で『連合国宣言』を発表したことにより、中国は反ファシズム陣営の四大強国に入った。1943年12月、重大な歴史的意義をもつ『カイロ宣言』が中英米3国によって共同で発表され、それは反ファシズム陣営の日本帝国主義に対する反撃の総原則となった。1945年7月、全世界人民の心からの支持を獲得した『ポツダム宣言』が再び中英米3国政府によって共同で発表され（8月にソ連も参加）、これが全世界におけるファシズム戦争屋滅亡の弔鐘を鳴らし、日本ファシスト打倒の檄文となった。中国の声望と影響はその当時、全世界で確かに大きかった。

われわれは、中国抗日戦争の世界反ファシズム闘争にたいする大きな貢献を分析したあと、さらにもう一つの問題を考えなければならない。それは、中国が1840年以降、帝国主義列強との数々の闘争でいつも屈辱を受け、失敗に終わったとい

う問題である。抗日戦争前の百年に近い期間、中国には国際的義務をこなす能力がほとんどなかった。しかし20世紀40年代に入ってから、日本帝国主義の強大な圧力に直面したにもかかわらず、中国は逆にこの強敵にうち勝って、中国全土から日本侵略者を追い出すことができた。それはなぜなのか？ 抗日戦争勝利後、内外の歴史学者はこの問題について、つっこんだ研究を行ったことがある。彼らは異なった立場に立って、種々さまざまな解釈を提出した。ある者はこう語った——中国抗日戦争の勝利はまったく連合国軍の力に頼ったものであり、ソ連の中国東北地方への出兵とアメリカの原子爆弾2個の投下が世界史の進行過程を変えてしまった、中国は連合国によって解放された国だ、と。また、ある者はこう語った——中国抗日戦争の勝利は国民党に功績を帰すべきだ、国民党軍は正面戦線で力強く日本軍の侵攻をくい止めてその実力を消耗させた、このため戦争は日本の敗北で終結したのだ、と。もちろん、より多くの学者はこう認めている——抗日戦争の勝利は中国共産党が提唱・指導した抗日民族統一戦線のたまものだ、中国共産党は中国人民を指導して日本帝国主義にうち勝ったのだ、と。70年も過ぎた現在、われわれはこの戦争をふり返って見ると、その歴史の全貌が多少ともはっきり見てとれるであろう。近年の学術研究の成果も次のことをわれわれに教えてくれた。中国抗日戦争がこのように輝

かしい勝利をおさめた最も根本的な原因は、それが全民族の反侵略戦争であったことにあり、中華民族全体の空前の覚醒という条件下において、全民族がしっかりと団結してかちとった大きな成果なのである。愛国主義精神の大発揚と全国各民族の総動員は、抗日戦争の勝利をかちとるための最も重要な保証であつた。

中華民族の覚醒には一つの歴史過程がある。1931年の「九・一八」事変後、東北地方が速やかに日本帝国主義の植民地となり、日本侵略者が略奪・殺りく・奴隷化・侮辱をほしいままにして、東北地方はこの世の地獄と化した。亡国の民の生活の苦しさ、主権喪失の屈辱が深く全国人民の感情を傷つけた。しかし蒋介石を代表とする国民政府は国際世論に希望を託し、「外敵を打ちばらうには、まず国内を安んぜよ」という方針を固持した。このため、日本侵略者は野望に燃えて、侵略の魔手を山海関以南に伸ばした。1933年、山海関の陥落後、華北地方はいまにも第二の「満州国」になりそうな危険に直面した。「塘沽協定」「秦・土肥原協定」の締結後、華北の門戸が開かれ、日本が中原に大挙進攻する条件が整った。そして、1937年の盧溝橋事件で日本の全面的中国侵略の火ぶたが切って落された。戦端が開かれるや、下層の人民が殺りく・蹂りんの脅威を受けたばかりではなく、大地主・大ブルジョアジーなど上流社会でさえも亡びる危険に直面し、中華民族は生死存亡の

瀬戸ぎわに立たされた。こうした状況の中で中国人民は、自分たちが生き延びるための活路はただ一つ、すなわち団結して抗日救国のために立ちあがることだということをついに見きわめた。「国存せば則ち民は興り、国亡べば則ち民は死して身を葬る地なし」——この道理は、中国人民が苦痛に満ちた代価を払って始めて知ったのである。民族の覚醒は全民族の大団結をもたらし、共産党が提唱・指導する抗日民族統一戦線はいちはやく全国人民の心の中に根づいた。国民党政府は、全国的に高揚した抗日の意気込みに迫られて、ついに「ひとたび戦端が開かれれば、国土に南北の別なく、人に老若の別なく、いかなる人にも抗戦して国土を守る責務がある」と言った。国共両党はいままでの怨みを捨てて、共に国難に立ち向かった。全国人民は共通の敵がい心を抱いて強敵に抵抗する決意を固めた。男も女も無数の優秀な中国の人々が、国と民族の利益を己れの責任とし、必死の覚悟で戦場に赴いて勇敢に戦い、犠牲をものともせずにして自分のすべてを捧げた。海外の広範な華僑同胞を含めた社会各界の人々はみな、民族の危急存亡を最重要視し、挙国一致で外敵にあたり、怒涛のような抗日の嵐が広大な中国本土を席卷した。正面戦線では、国民党軍は勝利を勝ち取るよりも敗北するほうが多くても、そのたびに頑強な抵抗をつづけて、日本軍の兵力を大いに消耗させた。敵後方戦線では、英雄的な八路軍・新四軍及

び無数の抗日遊撃隊は、人民大衆を立ちあがらせて、独創的な地下道戦・地雷戦・スズメ戦・村落戦・遊撃戦などを展開するとともに、武装工作隊を組織して敵の心臓部にまで入り、次々と敵に打撃を与えた。日本軍は人民戦争のなかで終日びくびくしながらその日その日を送り、とうとう自ら滅亡の道をたどった。まさに歴史が立証したように、中華民族は征服しうるものではない。全民族の大団結が実現しさえすれば、いかなる強敵でも人民戦争の洋々たる大海原に埋葬されるにちがいない。

民族の覚醒、挙国一致の大団結によって、愛国主義の精神がこの上もなく高揚した。無数の抗日の烈士たちは、わが民族の崇高で凛とした気概と精神をもって、全国人民のために輝かしい手本を示した。佟麟閣・趙登禹・張自忠・左權・彭雪楓・戴安瀾および無数の将兵は死を見ること帰するが如く、わが身をもって国に殉じる精神を発揚し、中華民族のすぐれた伝統をあますところなく體現した。国と民族のためになした彼らの功績は、永遠に歴史に残るであろう。彼らの立派で高潔な品格は、中国振興のために永遠に全人民を励ましてくれるであろう。

中国の抗日戦争は、国をあげて人民を動員した反侵略戦争である。国共両党の軍隊は、異なった戦線で日本侵略軍と作戦し、互いに呼応しあって戦う時もあった。この二つの戦線はいずれにして

も抗日戦争を支える重要な構成部分であった。しかし、抗日戦争史をふり返って見ると、中国共産党及びその指導下にあった人民武装勢力が敵の4分の3の兵力を掣肘し、抗日戦争の全過程において柱石の役割を果たしたと、われわれは指摘しなければならない。それは、中国共産党が敵後方戦線での作戦を堅持しただけでなく、さらになみなみならぬ努力を払い、広範な人民大衆（国民党支配区の人民を含む）、ブルジョア民主派及び結集できるすべての力を動員して抗日戦争の大奔流に身を投じさせ、これによって挙国一致で外敵にあたるというすばらしい情勢を形成したからであった。このような政治的影響と指導的役割は、いくつかの戦役の役割などとは到底はかり比べられるものではない。

中国の抗日戦争は、中日両国の関係史上、確かに一つの大きな波瀾であった。中日両国は、一衣帯水の間にある隣国である。中日両国は2000年余りの善隣友好関係を有し、中日両国人民は長い伝統的友情をもっている。しかし、日本軍国主義者の引き起こしたこの戦争によって、中日両国間の伝統的友情は傷つけられた。中国人民は巨大な災厄をこうむり、また同時に日本人民も空前の災難に見舞われた。戦争が両国人民にもたらしたのは同じ苦難であり、同じ一家離散であり、また両国人民の心に残した癒しがたい傷あとも同じであった。中日両国人民の前に置かれている最も重要な

ことは、歴史の経験を総括し、戦争の中から教訓をくみとって、二度と悲劇が起きないようにすることである。「劫族を歴尽し兄弟在り、相逢ひて一笑し恩仇泯ぶ」。中日両国人民がこの戦争を完全に認識した時に、「中日不再戦」のスローガンは始めて真に実現するであろう。

70年の歳月が矢の如く過ぎ去った。この風雲激変の半世紀余りに、中国は長い陣痛を経て、ついに新しい夜明けを迎えた。今日、われわれは、明るい陽光を浴びながら富み栄える未来へ勇躍邁進するにあたり、あの70年前の血なまぐさい戦争を永遠に忘れてはならず、あの民族解放のために命をささげた烈士たちを永遠に忘れてはならない。

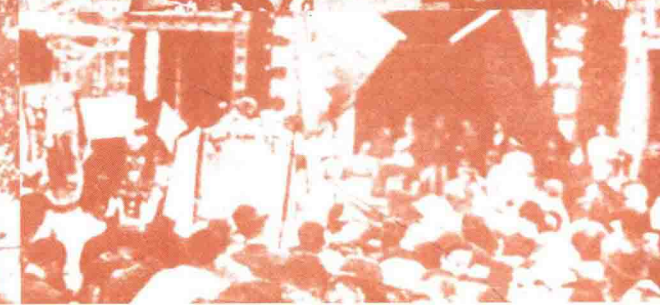
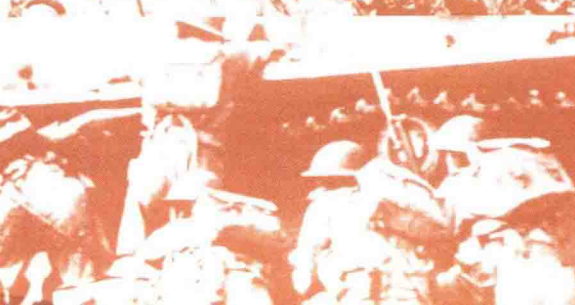
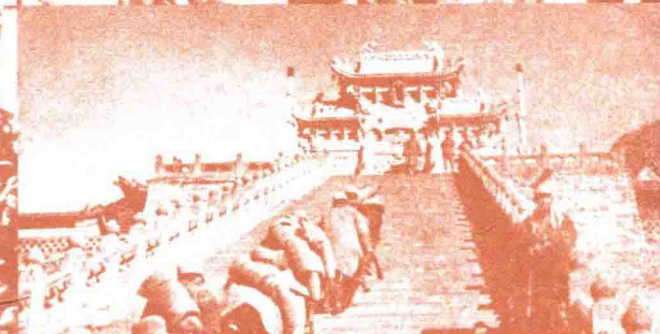
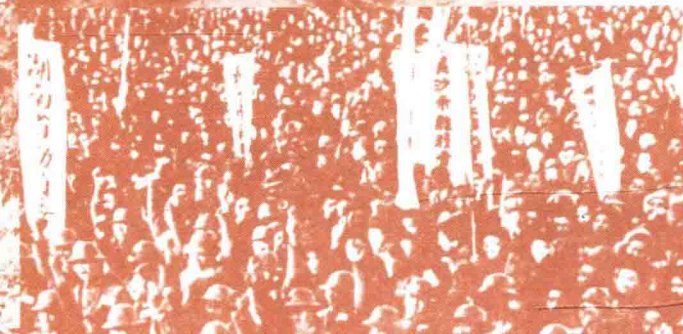
偉大な国際反ファシズム戦争は永遠に不滅である！

偉大な抗日戦争は永遠に不滅である！

この正義の事業のために命をささげた烈士たちの名は永遠に不滅である！

『記録 / 中国抗日戦争史写真集』

編集委員会 編



『記録 / 中国抗日战争史写真集』編集委員会

顧問：張承均 劉建業

編集主幹：沈 強

編集委員：李宗遠 羅存康 唐開文

曹 芸 李 鑫

2014 年初版発行

ISBN 978-7-119-08965-2

© 2014 中国 北京 外文出版社有限責任公司

外文出版社有限責任公司出版

中国北京百万莊大街 24 号

〒 100037

<http://www.flp.com.cn>

中国国際図書貿易総公司発行

中国北京車公莊西路 35 号

〒 100044

北京 P.O.Box399

中華人民共和国にて印刷

目次

第一章		第十一章	
日本の大規模な中国侵略の準備	1	中国の独立抗戦の堅持	109
第二章		第十二章	
東北三省の陥落	7	太平洋戦争の勃発	117
第三章		第十三章	
華北、急を告げる	19	根拠地軍民の反「掃討」闘争	123
第四章		第十四章	
盧溝橋の畔に燃え広がった全民族抗戦ののろし	29	中国人民の苦しい奮戦	135
第五章		第十五章	
中国の血みどろになった抗戦	45	戦略的反撃への転換	141
第六章		第十六章	
八路軍、新四軍の敵後方への挺進	59	世界反ファシズムの勝利	155
第七章		第十七章	
投降、分裂、後退に反対	71	抗日戦争の最終的勝利	161
第八章		第十八章	
日本軍の残虐行為	79	降伏文書の調印と戦犯への裁判	171
第九章		第十九章	
敵後方戦場の強化と発展	87	中日友好と中日不再戦	181
第十章			
世界人民の中国抗日戦争への支持	99	中国人民抗日戦争の年代記	186

第一章

日本の大規模な中国侵略の準備

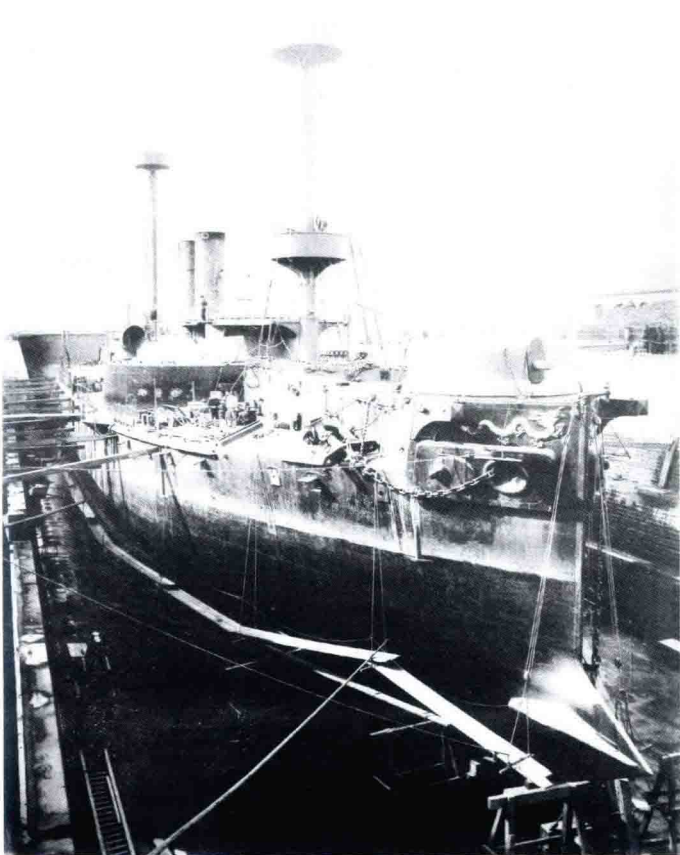
中国と日本は同じアジア東部に位置する、2000年にわたる文化的往来を持つ善隣国である。19世紀60年代までは、両国は鎖国状態にあった封建制国家で、いずれも西側列強からの侵略と略奪の危険にさらされていた。1868年日本は「明治維新」により天皇を専制君主とする統一国家を打ち立てた。それによって、「封建時代の生産関係を資本主義の生産関係に転換した」。資本主義は日本国内で迅速に発展を遂げた。日本は資源がきわめて乏しい島国であり、天皇制の確立によって欲張りの武士道精神を発揚させ、両者が結びついて、日本が迅速に对外侵略を基本国策にする軍国主義の道を歩むようになった。

日本は中国を对外侵略の最も理想的な目標とし、その侵略拡張を基調とする「大陸政策」はあくまでも中国征服を中心内容とするものであった。

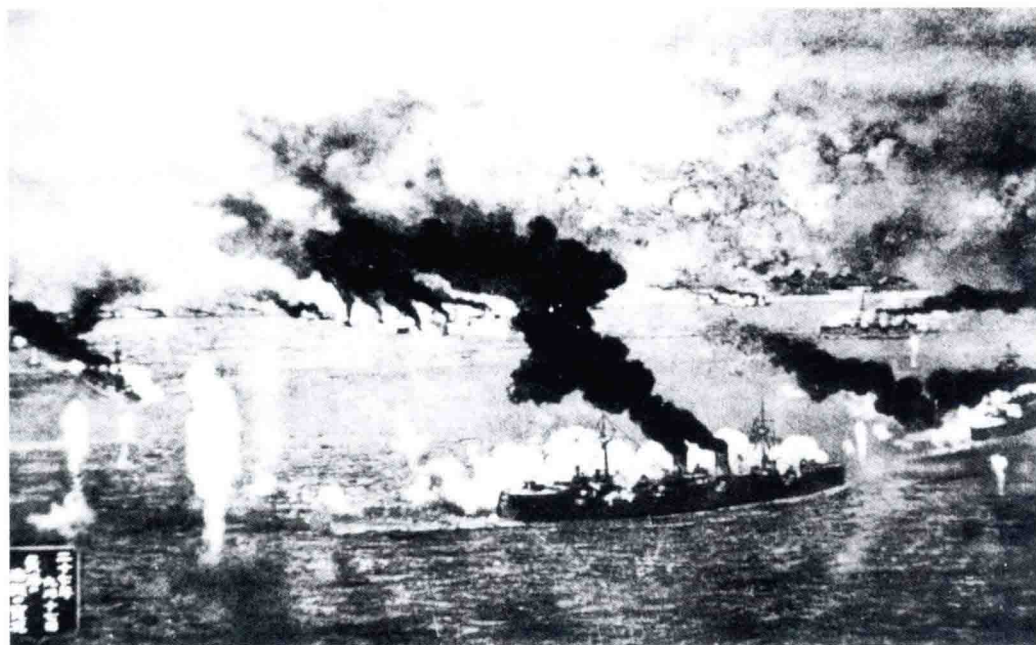
1874年の台湾占領に始まり、日本は中国への侵略・略奪に拍車をかけた。1894年日本は甲午戦争（日本では日清戦争といわれる）を起こし、中国でのさまざまな権益と大量な賠償金を獲得した。1900年、日本は八カ国連合軍に参加して北京を攻略した。巨額な賠償金のほか、山海関か

ら北京までの鉄道沿線の軍隊駐屯権を獲得した。1905年の日露戦争の勃発によって、ロシアから中国の南満における特権を奪い取った。日本の侵略行為の実現で、中国を徹底的に征服しようとする日本の野心はさらに膨れ上がるようになった。第1次世界大戦が勃発後、西側列強がヨーロッパ戦争のために忙しいことで、東方のことに気を配る暇さえないことに乗じて、中国を独り占めするテンポを加速した。20世紀20年代初頭、日本は中国を侵略する勢力の中でも最大の帝国主義国となった。

しかしながら、侵略者の野心はとどまるところがなかった。1927年春、軍国主義勢力を代表する拡張主義者・田中義一は首相に就任するやいなや、東方会議で「中国を征服せんと欲せば、先ず満蒙を征せざるべからず。世界を征服せんと欲せば、必ず先ず中国を征服せざるべからず」というテーゼをうちだした。東方会議で定めた中国侵略の具体的な計画は日本の對外拡張の総綱領となった。その日から、日本の中国への侵略行為は一步一步迫ってきた。「山雨来たらんと欲して風楼に満つ」。苦難に満ちた中国はいままさに日本帝国主義の侵略の脅威に直面していた。



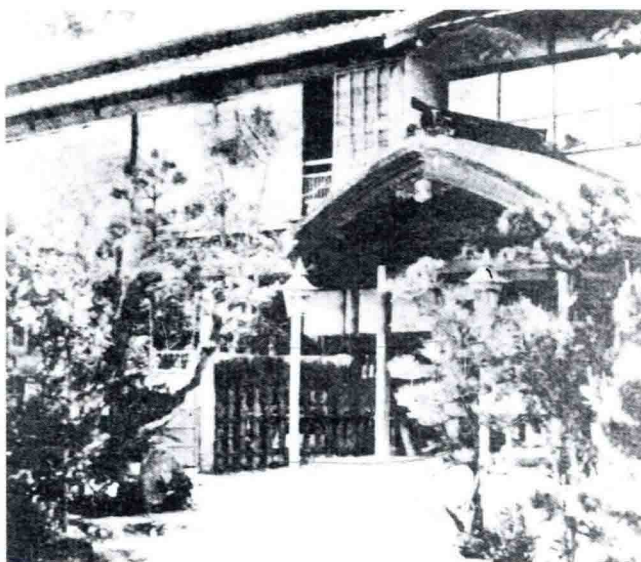
■ 黄海海戦で日本軍の砲撃で破損した北洋艦隊の旗艦・鎮遠号。



■ 1894年9月17日、日本が甲午戦争を起こした。写真は中国北洋艦隊と日本艦隊との黄海激戦。

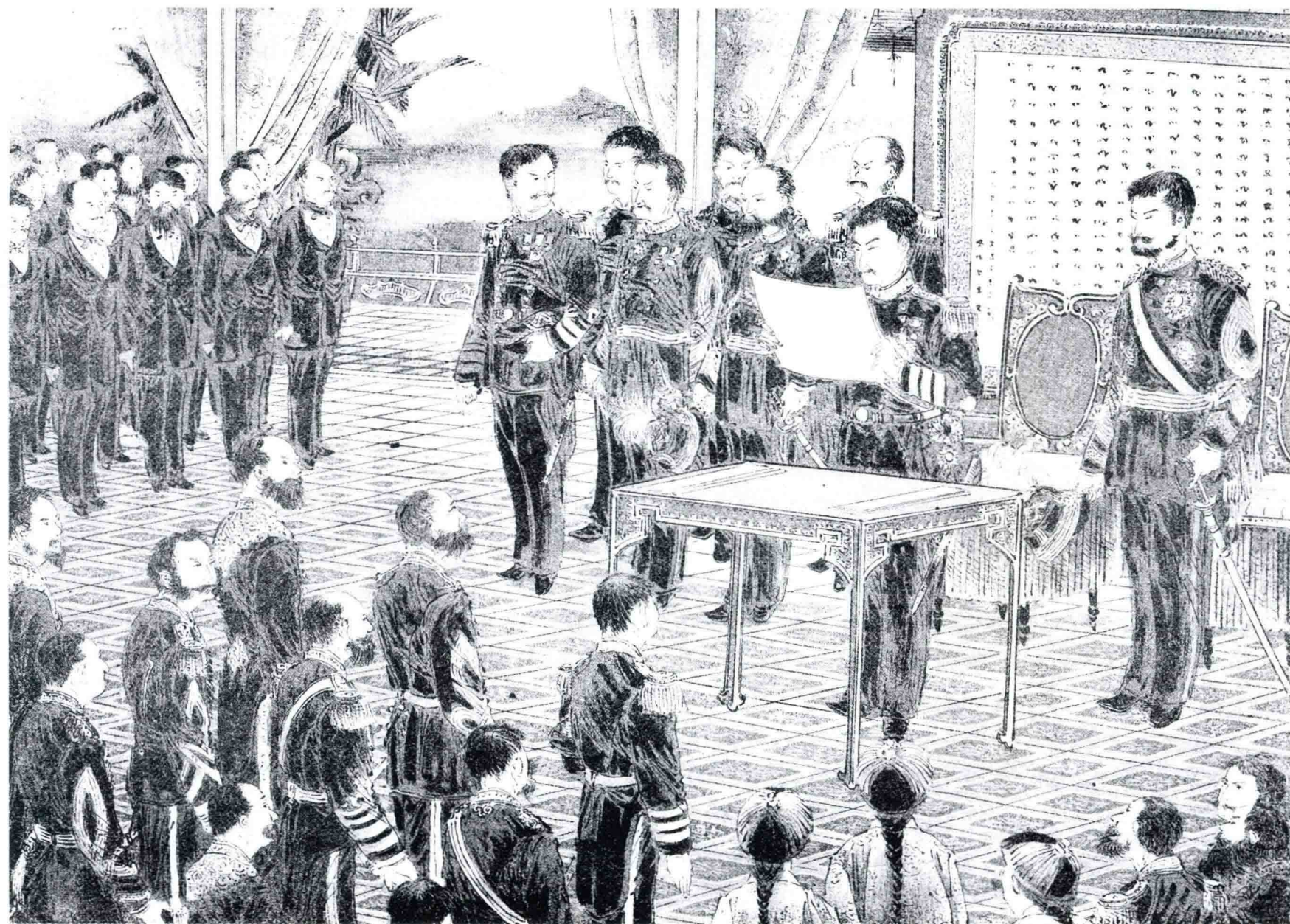


■ 甲午戦争（日本では日清戦争といわれる）際、日本軍は中国の旅順で野蛮で血生臭い大虐殺を行った。

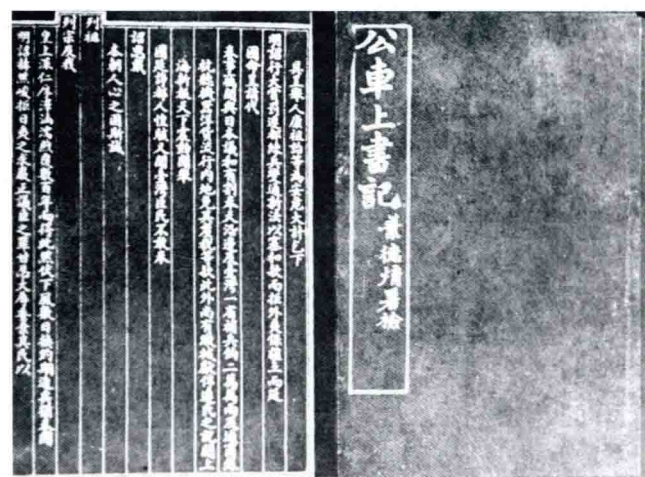


■ 1895年、日本は不平等な『馬関条約（下関条約）』によって台湾を奪い取った。写真は『馬関条約』調印の場所——日本下関の春帆楼。

■ 1895 年日本は中国の宝島台湾を強奪、占領し、台湾に「総督府」を設置した。写真は日本の版画に描かれた日本の台湾における植民地支配の始まりを象徴する「始政式」。

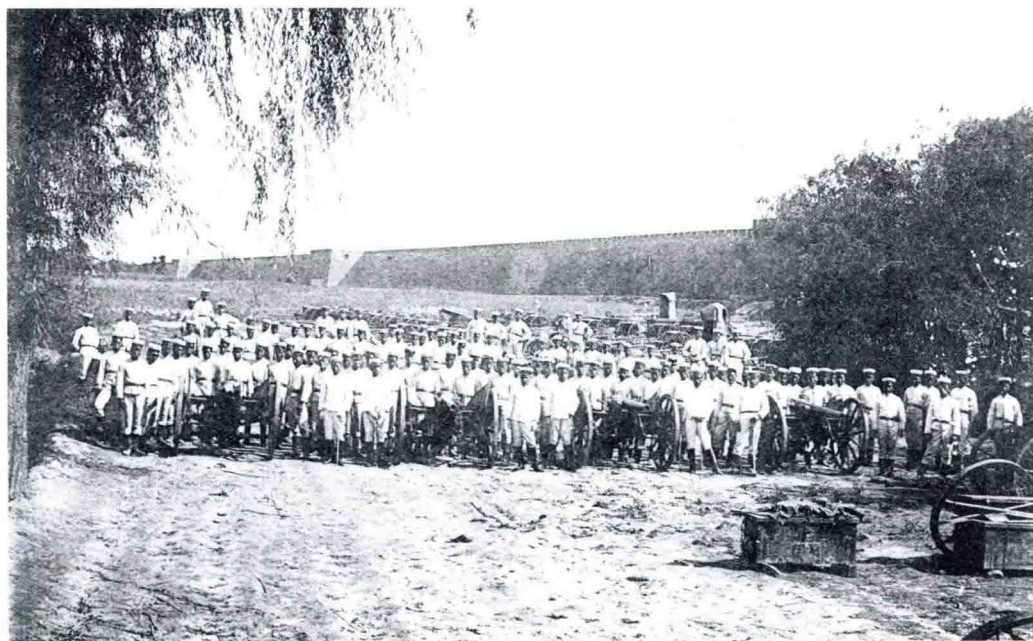


■ 1895 年、北京で官吏登用試験に受験した広東省の挙人（官吏登用試験の郷クラス試験に合格したもの）康有為は北京に滞在していた各省の挙人千余人と共同連署の形で清の光緒帝に陳情書を上呈し、馬関条約、領土の割譲に反対し、変革によって国の強大をはかることを求めた。それは歴史において『公車上書』といわれた。写真は『公車上書』の表紙と最初のページ。





■ 1900年8月、日本を含む8カ国連合軍が北京に攻め入り、翌年9月7日、清朝政府に迫って売国的な『辛丑条約』を締結させた。写真は、『辛丑条約』調印式。左側が8カ国の公使、右側が清朝政府の代表であった奕劻（前）と李鴻章（右）。

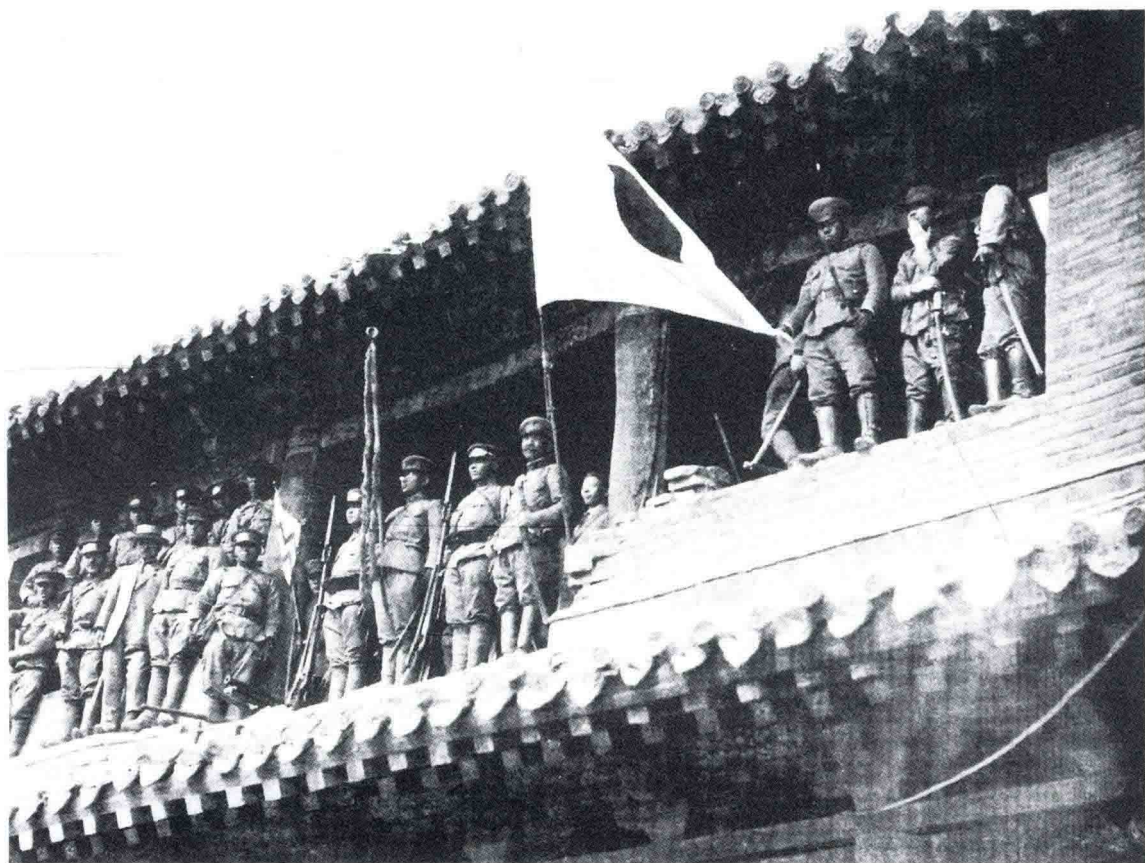


■ 北京德勝門外に駐屯した日本軍砲兵。

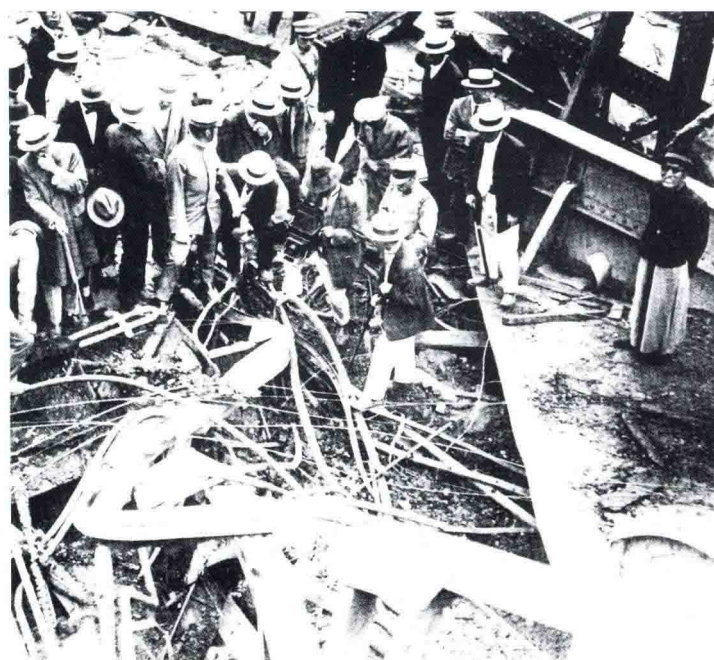


■ 1927年6月から7月7日にかけて、日本国首相の田中義一（右3）は東京で「東方会議」を主宰、開催した。会議で『対中政策要綱』を制定し、まず中国の東北地方と内蒙古を占領、ひいて全中国を占拠する侵略拡張政策を定めた。写真は会議の現場。

■「東方会議」の後、日本は中国侵略のテンポを速め、北伐を食い止めるため、1928年山東省に派兵した。写真は日本軍の済南占領時の模様。



■ 1928年5月3日、日本侵略軍は山東省済南で大虐殺を行い、無差別に住民を殺戮した。5月3日一日だけで日本軍に野蛮にも虐殺された中国の兵士や住民は1000人以上にのぼった。写真は日本軍に殺戮された罪のない人びと。



■ 1928年6月、関東軍は皇姑屯で北京から東北にもどろうとしていた『中華民国陸軍・海軍大元帥』張作霖が乗った列車を爆発した。写真は皇姑屯事件の爆発現場。